



## 幼き頃の思い出 ―祭り―

会長 高岡保宏 (S37)



稲の刈り入れも終わり、あちこちで太鼓の音が聴こえ、播州一円が祭り一色になり、豪華に飾り立てた屋台と男の勇ましい禪姿と「ヨイヤサ」の掛け声が村々を覆いつくしたが、今はそのにぎやかさもなく、祭りの後の寂しさを味わっているこの頃です。

私は子どもの頃から祭りが大好きでした。私の村では学校の運動会が終わると屋台の太鼓をたたく練習が始まるのが決まりでした。小学四年生になると、屋台に乗せてもらえるので、早く四年生に

編集発行人  
高岡保宏  
白鷺教育会事務所  
姫路市飾磨区  
清水2丁目128  
(姫路市教育会館内)  
☎(079)233-0892

なりたいなあといつも思っていました。四年生になると、屋台に初めて乗るので、「新乗り子」と言いました。村中の人からお祝いでして沢山の御花が貰えるので、大変嬉しい楽しみでした。しかし、

祭礼前の一か月は、乗り子にとっては青年団の厳しい指導に耐えなければなりませんでした。

総社は熊



「ベネチア」花畑 時子

野神社と言い、十二台の屋台が集まっていました。ほとんどの屋台は布団屋台で、一か村だけ御輿屋台でした。当時、屋台は担いで移動するのが普通でした。

担いでもらって乗る時の気持ちは、何とも言えないいい気持ちで、特に宮入、宮出の時の乗り子と担ぎ手の息の合った練り(エーエンヤ、ドッコイサ)の時と、差し上げて宙に舞い上がった時の感じは、言葉では言い表せない良い気分でした。

と誓いあう。そして宮出が始まる。最後の屋台が出る頃は日も暮れている。提灯を付けてそれぞれの村へと帰って行く。これで楽しかった一日が終わるといいうわけです。

十二台の宮入が済むと昼休み、境内で家族一緒に食べる弁当、母親等が朝早くから腕によりをかけた作ったものだけに、これがまた実に美味しい。弁当が終わる頃に神殿

前では天狗が浄舞を舞い、木方が一堂に集まり拍子木を鳴らし、帰途の安全と来年も同じように奉納しよう

翌日の学校では、屋台の話でもちきりでした。それぞれが自分の村の屋台の自慢のしあいです。A村の子は欄間の彫刻、B村は幔幕、C村は鍔金具の海老の形、D村は伊達綱、E村は屋台の大きさ・重さ、F村は高欄の造り等々、それぞれが自分の村の屋台の長所を言い合い、得意になったものでした。私の村は小さな村だったので、人口も少なく担ぎ手は少なかった。しかし、屋台を落としたことがないので、それが自慢でした。また、太鼓の音が腹に響くような低くて大きな音で、これも自慢の一つだった。このように村祭りは、子どもたちに自分の村に対しての誇りとアイデンティティをもたせ、帰属意識を育む大きな役割を果たしていました。良い伝統として今後も繋いで行きたいと思います。